

第2回 名産「長十郎梨」を生んだ大師河原の梨栽培

平成 24 年9月4日(火) 18:30~20:30

川崎区役所 7階第1会議室

長島 保 氏(地域史研究家)

■講師紹介

大田区に住む川崎市民、地域史研究家で、1934年、東京市京橋区に生まれ、東京都立大学人文学部史学科卒業。私立女子高校、公立中学校を経て、神奈川県立川崎高校に30年間在職して退職。その間、川崎市史編さんに従事し、かわさき市民アカデミーの前副学長や各地市民館の地域史講座などの講師を担当し、現在にいたる。退職後は、多摩川エコミュージアム運動にも奔走。多摩川大好き人間である。現在、NPO 法人多摩川エコミュージアム理事(前代表理事)、元二ヶ領用水400年プロジェクト代表。2011年度、日本河川協会総会にて河川功労者として表彰される。著書に「川崎市史・近代」(共著)、「川崎区の史話」(共著)、「川崎産業観光読本」(共著)、「二ヶ領用水400年」(監修・共著)ほか。



現在、NPO 法人多摩川エコミュージアム理事(前代表理事)、元二ヶ領用水400年プロジェクト代表。2011年度、日本河川協会総会にて河川功労者として表彰される。著書に「川崎市史・近代」(共著)、「川崎区の史話」(共著)、「川崎産業観光読本」(共著)、「二ヶ領用水400年」(監修・共著)ほか。

①はじめに

私がかわさき産業ミュージアムの立ち上げのとき専門委員を仰せつかりました。かわさき産業ミュージアムをつくらうよという言い出しっぺだったものですから。後藤先生とか大原先生のような大学のそれぞれ専門の先生と一緒に、とりあえず川崎区だけの段階でかわさき産業ミュージアム構想をスタートさせました。いずれは川崎市全体に広げようとしてまとめたのです。構想策定から 10 年を迎えた今年は、「区の木 長十郎梨」についての講演を川崎区より依頼されました。「長十郎梨」について、自分が住んでいる大田区の郷土博物館で数年前に講演をしたレジュメが出てきました。そのときの資料の中に、明治 39 年の2万分の1の地形図を基にして梨栽培のことがわかるようにしてあったものがでてきたのです。「川崎市史」に出てくるのは、明治 14 年の地形図を基にしたもので、お米と果樹を色分けした図なのです。明治 14 年の作図ですから、大分事情が違います。明治39年測図の2万分の1の地形図では果樹園の栽培地域がわかるように書き込んでありますので、本日は追加資料として配っておきました。

さて、私は多摩川梨については若いときから関心がありました。長十郎梨が大好きで、子供の頃からしょっちゅう食べていたものです。それが川崎区の工場地帯のすぐそばにある大師河原の出来野で発見されて育成され、広まったのだということを知りまして、大変驚きました。それが川崎区だけではなく、大田区の大摩川の沿岸にもたくさん栽培されていたということが分かり、私は最初、大田区側の梨畑のいろいろな事を調べるところから長十郎梨に近づいていきました。

そして2001年に、私の仲間を含め川崎区誌研究会というのを始めました。そこで会員が研究した成果を『史誌かわさき』という形で発行してきました。これがその記念すべき第一号、創刊号なので

す。その特集で、「川崎区にあった地場産業の歴史」と名づけ、その中に私が『果物のふるさと＝名産長十郎梨を生んだ大師河原の梨栽培』ということでもとめました。それが目にとまったようで、このテーマで議義を依頼され、今に至った訳です。

さてここへ来てびっくりしたのは、この長十郎梨が川崎区の「区の木」に選定されて、この9月17日に「区の木『長十郎梨』まつり」が開催されると言うのです。長十郎梨を先着 300 名様に無料配布するそうです。これは早く行かないと無くなってしまいますね。私も久しぶりに長十郎梨が食べられるなら飛んで行ってもいいなと思っています。

長十郎梨まつりで思い出したのは、7年前に俳優の中本賢氏が大騒ぎをしたことです。長十郎梨の里帰りと言い出して、川崎の中野島の梨園の方から若木を手に入れて、大八車に積んで運んだのです。本当は多摩川沿いの道路を来たかったのですが、道路で行列されたら困ると言われて、しかたなく、多摩川のサイクリングロードをずっと大八車で下って、幸区役所に一泊しました。その翌日に、ラ チッタデッラのラジオスタジオで、ラジオ中継をやったのです。そのとき私が呼び出されて長十郎梨について話をしてくれと言われまして、ラ チッタデッラのスタジオでパンチ佐藤氏と二人で対談しました。その最中に、中本賢氏が大八車を引っ張って到着したところを、「お帰りなさい」と言ってラジオを放送したということが思い出に残っています。

長十郎梨はこの地域に、川崎の生きた歴史となり、生活にいろいろ関わって話題をよんできた梨です。その意味でも長十郎梨のことを皆さんにお話できるのが嬉しいのです。

私が学校の教員だった時代のことです。ガリ版刷りのある会の機関紙に投稿したものをセットしたのが『多摩川梨の歴史』だったのです。それから長十郎梨との関わりは始まりました。その会員のお宅に何回かお邪魔して、梨造りというのはいかに手間のかかる農業なのかを散々聞かされました。そんなことがこの多摩川梨に近づいていった最初です。やがて川崎に来るようになってから、市史に関するようになり、少し自分が調べてきたものがある程度整理しなくてはいけないと思うようになり、同時に生徒に梨造りを教えようと、スライドに撮って教材づくりをしました。

ところが梨づくりというのは一年かかりますので、今度は川崎の上流になる多摩区生田にある農家の方と親しくなりました。一年間季節ごとに農業の手順があるのです。実際どうやって梨が造られるのか、それを写真に撮らせていただくというような形で通いました。そして秋になって観光梨園になり、大勢のお客さんが梨もぎにくるのです。私も子供を連れ、家族を連れて何回か梨もぎに行きました。そのときに採った梨が長十郎梨でした。そういう時代の大きな変化があるわけで、長十郎梨が瞬間に一気に戦前に流行ったのか、大師地域の農家がほとんど果樹栽培をやリ、その果樹栽培をやった農家がなんと海苔養殖もやっているのです。そのところに私は川崎の大師地域の梨づくりを学んで驚きました。何軒かのお宅に伺ってはいろんな話も聞き、まとめさせてもらいました。

私は多摩川の水で産湯を使い、多摩川で泳ぎを覚え、ずっと多摩川流域に住んでいて、今でも多摩川に関っている人間です。

とにかく長十郎梨は、かつて秋の味覚を代表する非常に美味しい梨でした。ただし、ものすごい欠点があるのです。採ってすぐ食べると美味しいのですが、一週間以上経ってしまったら、もう食べられたものではありません。よく果物が食べられなくなることを、「ボケル」と言います。人間もボケルと全然

だめです。私も少しボケ始めているので気をつけなければと思っていますが、とにかく長十郎梨はボケが早いのです。ボケたらどうしてあんなに甘みがなくなるのか不思議です。そのかわり採れたてはちょっと硬くて歯触りが良く、とにかく美味しい梨でした。その名産の長十郎梨が一時、特に明治の後半から大正にかけて、日本全国の梨の6割近くを長十郎が占めていたのです。

②川崎大師境内の「顕彰碑」

大師河原村に出来野という地名があります。当麻辰次郎さんが住んでいたところは、日ノ出という町名に変わっています。出来野という集落が昔の地名なのです。

そこで、当麻辰次郎さんがなぜ長十郎という名前をつけたのかと言うと、当麻さんのお宅は代々



【種梨遺功碑】

「長十郎」を屋号にしていたのです。商店の場合は屋号と聞けばピンとくるのですが、農家も屋号を持っていたのです。

当麻辰次郎さんのお宅は長十郎という屋号だったので、屋号を梨の名前に付けたのです。川崎大師平間寺に建っている顕彰碑にはつきりと書かれています。そこで最初に平間寺にある当麻辰次郎さんの顕彰碑、これを少し勉強しておきたいと思います。大師境内の大本坊、お寺の寺務所(事務所)になっていますから事務所といっても「寺」と書いた寺務所です。寺務所の玄関前辺りの左側の一角に何基かの碑が建っています。この碑の上に書くのを篆字という字で書くので篆額とい

ます。その篆額は、「神奈川県知事正四位勲二等有吉忠一篆額」と詳記され、「種梨遺功碑」と刻まれています。それから下の文章は橘樹郡長の隈元清世撰、ようするに文章は郡長が書いたということです。さて、左側の文章は私が訳したものです。【資料1参照】

種梨遺功碑

果物の種類はたくさんあるものの、近ごろ長十郎と称するものがある。多産でうまく、たいへん良い品種だ。当麻辰次郎君が発見した。君は農業のかたわら、梨の品種改良に長年にわたって励み、ついにこの新種を得た。それ以来、広めることに努めたので、競って栽培されるようになり、その評判は益々高くなった。梨のなかの王といわれるゆえんだ。長十郎とは君の家の屋号からつけられた。君は本村の人で、文政九年十一月一日に生まれ、明治三十八年四月十一日に没した。のち、農商務大臣から銀杯を賜り、本県知事から褒状を授かった。その功績を賞するために、本郡(橘樹郡)果物業組合連合会は、ここに碑を建てることをはかって、私に文を頼んだ。そこでそのあらましを叙述して世に伝えることにした。

〔筆者作成〕

神奈川県知事正四位勲二等有吉忠一篆額
 果宗多種類而吾邦晚近有称長十郎梨豊産而美味頗良種当麻辰次郎君所発見也君業農旁種梨励精多年遂得此新梨苗爾來專凶繁殖遐邇亦競栽培之今世殆洽海内需要愈夥声值益高寬可謂梨中王矣所謂長十郎者蓋出於君之家名君本邨人以文政九年十一月朔日生以明治三十八年四月十一日歿後農商務大臣賜銀盃本県知事授褒状以追賞其功績頃者本郡果物業組合連合會胥謀茲建碑請文予自叙其梗概以伝于世
 大正八年三月
 橘樹郡長 正五位勲四等隈元清世撰
 猪瀬博愛書
 内藤慶雲鐫

【資料1】種梨遺功碑の漢文

非常に手際よく書かれています、残念なことに昔の顕彰碑というのは漢文体なのです。今子どもが調べに行ったら何と書いてあるかわからないと思います。大学生だって読めないのではないのでしょうか。私たちにとっても、時には難しく読めない漢字を使っていますから。今後こういう顕彰碑を建てるのであれば、小学生でも分かるような碑にしなければならないというのが私の持論です。

昔は漢学者が「自分はこれだけ学問があるのだ」ということをひけらかすためにこういう文章をよく書いたのです。だけどみんなに読んでもらわないとなんの意味もありません。知らしめるためにこれを建てるのですから、そういう意味ではこれからは小学生にもわかるようなやさしい言葉で記念碑や顕彰碑はつくるべきだと思います。

私は当麻辰次郎さんの弟さんが健在だったときにお会いして、「ひととなり」を聞いたことがあります。テープに残してあります。彼は、普通だったら、こういう品種を発見すると今の時代だったら特許をとって売って売りますが、そんなことはしませんでした。それで苗木が欲しいという方にはどんどん差し上げたのだそうです。だから広まっていったのだらうと思います。利益などをかえりみず、自分が発見した良い新種の梨の苗木を、どんどん広げたということです。

当麻さんのお寺は醫王寺といって、川崎競馬場の隣に墓地もあります。それでは梨がなぜそのように広まったのか、についてはもう少し先でお話することにして、川崎には梨がどうやって入ってきたのかという話をしておきたいと思います。

③梨中の王＝長十郎梨

辰次郎さんが新種を発見したのは、明治22(1889)年なのです。最初のうちは、そんなに広がらないのですけれども、やがて、明治30(1897)年に黒星病が流行りました。梨の大敵と言われてますが、そのとき長十郎梨はいかに病虫害に強いかが実証されたのです。その明治30(1897)年のその前に辰次郎さんが発見したといってもいろんな新種を掛け合わせたりしてそこで発見するわけですから、育成したという風にも言えますが、長十郎という名前をつけたのも明治26(1893)年なのです。

だから普通長十郎梨の出現というのは、どなたも明治26(1893)年と言っています。そして今言ったように黒星病で周辺の梨園が大きな打撃を受けるのです。長十郎梨だけ大丈夫だったというのはなぜだったのでしょうか。病虫害に強く、特に黒星病の犠牲にならなかった事と、袋がけをしなくても大丈夫だった事と、たくさん採れたということらしいのです。

ここにも書いて置きましたが多産で、しかも水気が多くて美味で、そして梨の中の王様だというようなことになって、またたく間に多摩川の流域に広がり、更には市場で話題になり、どんどん梨の産地に広がっていきました。

大正の初期に全国の梨栽培面積中の6割方を長十郎梨が占めたのです。そのうちに長十郎梨に対抗する形で二十世紀というのが出てくるのですが、それはもっと後の話なのです。ところで、長十郎梨はそんなに美味しかったのでしょうか。実際に他の梨をいろいろ栽培していた人が上流の方にはいました。多摩区菅の安藤英輔さんが『梨作り60年』という冊子を書いているのです。長十郎がもてはやされたのは多産だったからだということです。そして袋がけするような手間がかからなかったからで

す。とにかく多産でたくさん採れたという事がうけたのであって、うまさという点では長十郎よりも美味しい梨が、昔はまだいくつもあったというのです。しかしそれらは、甘いがゆえに虫に喰われやすかったので、非常に栽培しにくかったという事を『梨作り60年』の中で言っています。なるほどと思いました。

ですから長十郎があつという間に全盛期を迎えて、急速に変わっていきます。最初から硬くなくて柔らかくて、ジューシーな梨、つまり幸水や豊水などが出てきました。そして冬までもつ新高は、大きな梨で冷蔵庫に入ると冬までもつのです。だけどもみんな柔らかく甘い、長十郎のように柔らかくなったら全然甘みがなくなってしまうということとは違うのです。昔から美味しい梨はあつたのだそうです。そういうことがわかりまして、なるほどと思いました。そうすると長十郎梨は育てやすかつたのだと、そして沢山とれたのだと思いました。そういうことで一気に普及したのだなと私は思うようになりました。在来種で美味しいものに赤穂(あこう)というのがあつたそうです。塩の産地の赤穂浪士の赤穂ですね、それから幸蔵、泰平、こういう梨はけっこう美味しかつたそうです。しかし、甘いがゆえにすぐ虫に喰われてしまったようです。

④江戸時代の梨産地

まず、文政年間に書かれた『江戸名所花暦』という本があります。江戸近郊のお花の名所を、何月何日頃が見ごろだとか書いています。岡山烏が書きました。「なまむぎ(生麦村)同十七日頃、東海道川崎駅のさき」といって、この駅というのは宿場の駅です。川崎駅の先ですから市場とか鶴見だとか、その方面だろうと思います。「大森のほとりより大師河原へ行く道、六郷、川崎のあたり一面なり」と、これは花だと言っているのです。梨は花を咲かせるために栽培しているのではないのです。実を採るために栽培しているのですから、その花がとにかくこういう風に咲いていたのです。そして、『新編武蔵風土記稿』というのが、文化文政の時代に編纂されるのです。幕府が書いた地理の本です。その中に川崎領の産物として塩と梨子(なし)の二つが掲げられています。文章の中に「川崎よりおしなべて作り出す。その種類甚だ多し、これは近きころより多く種(つく)ると云う」、だから江戸時代の後期に入った時期に、川崎周辺で梨がつくられているということです。

それにしても、まだ具体的なプロセスはわからないのです。さらに大蔵永常という有名な農学者が書いた、『広益国産考』があります。これも江戸時代の後期のものですが、「梨を多く作りて、利を得るは、美濃国大垣辺にまさるはなし。いつの頃よりか此の苗を下総国古河(こが)に植え広め作り、江戸に出せしより、古河梨として賞翫せしを、寛政前後に品川、川崎の在に植え広め益すこと、又夥(おびただ)しかりけるよし」という記述があります。そうすると、寛政前後に川崎の在と言っており、どこをさしているかわからないのですが、恐らく鶴見方面だと思います。あと、「日本物産年表」も江戸時代の後半に出ています。「寛政十二年川崎辺に梨を栽培し始む」というのです。ですから、江戸時代も中期というか、後半に入るとどうやらあちらこちらから梨が入ってきたような気がするのです。諸説がある多摩川梨の栽培の起源をめぐって川崎に関してまとめてみたのです。

鶴見辺りは元禄年間(1688～1704)で、割合早いのです。しかし、川崎にはまだ入ってこないのです。そこで、果樹としての栽培は寛政年間(1789～1801)頃からだろうと言われており、おおもとは下総方面の古河辺りからいったん鶴見の方に入ったようだ、そして鶴見の方から大師河原へ移植したのではないかということが地元でも言われています。地元の殿町の旧家の寺尾家では、鶴見の方

から梨が来たというようなことを言っていました。それが途中で、安政年間に衰微してしまいます。実は安政年間は江戸時代では大変な年で、大地震、津波、大水害、なんだか今とちょっと似ているのです。さらに、安政というのは疫病、コレラの蔓延、コレラっていうのは外国から入ってくるのです。日本が開国したら、横浜から入ってきます。治外法権ですから、外国の船の中まで日本の検疫官が立ち入ることができないのです。不平等条約の結果です。コレラがたくさん入ってきてしまったのです。この安政のコレラというのは大変だったのです。コレラというものですから、みんなが「コロリ」「コロリ」と死んでいったと言うのです。コレラをもじってそう言ったのです。それほど大変でした。ですから安政の時期は大変だったのです。川崎にきた梨も、津波での被害で途絶えたか衰微したかで、そしてもう少しして、鶴見の方から移植したという風に考えられています。大師河原では、明治に入ってから本格的に広まっていくということです。

⑤多摩川左岸の梨栽培

実は多摩川両岸の下流地域では、沿岸に梨畑が広がったのです。大田区側の左岸、早くから大産地で、明治期はこちらの方が広いのです。明治の頃に俳句で有名な正岡子規がまだ京浜電鉄が開通していない前に、東海道線に乗って多摩川の鉄橋を渡り、川崎で降りて、人力車に乗り換え大師参詣に行きます。その時に「川崎を汽車で通るや梨の花」とう句を吟じているのです。ところが、それを誰かが改ざんして「多摩川を汽車で渡るや梨の花」と広めた方がいるのです。

正岡子規は川崎の梨の花を見てその句を作ったのかというと、そうではないのです。当時梨畑が広がっていたのはどこかと言うと、川崎や鶴見ではないのです。どこかと言うと多摩川なのです。多摩川も川崎側ではなく、河川敷があるのは大田区側なのです。今、その広い河川敷は大田区の総合グラウンドやゴルフ場になっていますが、昔は全て梨畑だったのです。正岡子規はその河川敷を渡った時に、梨の真っ白な花がものすごく印象に残っていたのでしょう。そして汽車が川崎に止まったので「川崎を汽車で通るや梨の花」と吟じたのです。

私はそれが「多摩川を」と読みかえるのは間違いだと思います。正岡子規の全集を探しても出ていないのです。その内容を『神奈川新聞』の記事に書きました。そしたら地元の中島八幡神社の入口に「多摩川を汽車で渡るや梨の花」と言う石碑ができていて、驚いたのです。原典を全然確かめずに石に彫ってしまったのですね。

稲毛神社の境内にも正岡子規の句碑がありますが、解説文の中に同じように「多摩川を汽車で通るや梨の花」と載っています。そう言えば、正岡子規は川崎に何回か来ているようです。子規は、最後は病気で歩けなくて大変だったようです。結核になり、その結核菌が骨髓に入って歩けなくなった

◇明治5 = 1872年六郷方面の梨生産額

村名	生産量	金額	米産出金額
雑色村	2,190荷	1,095円錢	865円
八幡塚村	1,200 "	600 "	1,756 "
高畑村	1,200 "	600 "	844 "
羽田村	1,100 "	550 "	1,556 "
桃谷村	360 "	270 "	3,361 "
翻新宿村	150 "	75 "	3,702 "
萩中村	60 "	30 "	1,590 "
道塚村	35 "	26.25 "	287 "
小林村	30 "	22.50 "	411 "
浜竹村	30 "	15 "	236 "
町屋村	30 "	15 "	713 "
古川村	17 "	6.80 "	182 "
計	6,402 "		

<1荷=10籠>

【『東京府志料』から・一部補訂】

【資料2】明治5年(1872年)六郷・羽田方面の梨生産額

のです。大変な病気ですが、あのような方は頭がしっかりしているから、家に居ても前に取材した事を題材にして句にしてしまうのです。句にした時に現場に出かけて行っと思ったら大間違いです。

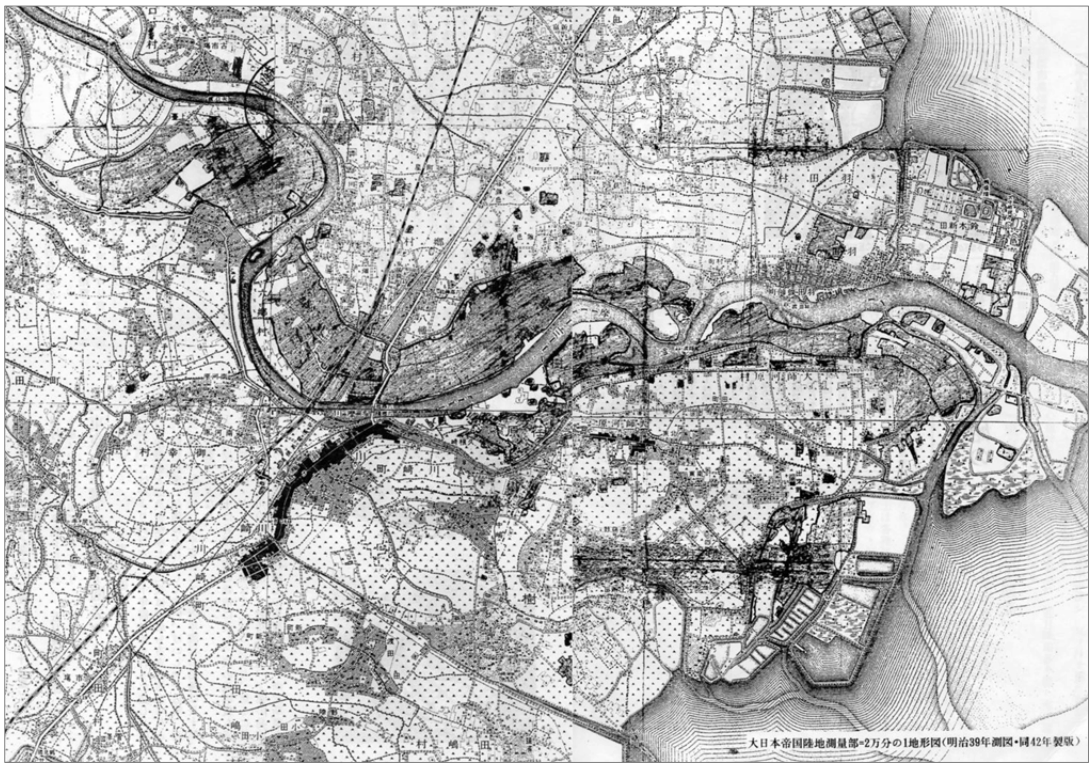
あの正岡子規が「川崎を汽車で通るや梨の花」と読んだ梨畑が、一面に六郷鉄橋の両側に広がっていました。その場所は、明治の後期までは左岸大田区が名産地でした。【資料2参照】明治22(1889)年に六郷地域が六郷村と名乗ります。それまでは八幡塚・高畑・雑色村という六郷六か村といい、のちに六郷村となりました。そのうち河川敷を多く占めているのは、八幡塚村と高畑村なのです。高畑は今の西六郷になるわけです。ここに多摩川の広い河川敷が入っていました。

明治14(1881)年の測図【資料3-1】も良く見て頂くと、水田の記号の薄いところが塗られているところと何も塗られていないところは畑地なのです。その畑地を梨とは言い切れないが果樹園がありました。明治14(1881)年段階は川崎の方が広く、大田区側では六郷あるいは右の羽田ととびとびなのです。羽田は農村地域の本村と獵師町の本村と二つに分かれています。そして大師河原の人たちは、羽田の渡しを渡って買い物に行くのです。これからさらに羽田道と称されている道を通って大森へストレートに出してしまうという近道がありました。わざわざ川崎へまわって東海道を通ることは大回りになり、当時の人たちはしなかったのです。みんな羽田獵師町を通して江戸・東京へ行きました。明治39(1906)年の測図【資料3-2】の果樹記号をみると、大田区側は東海道両側の河川敷一帯が全部梨園になっています。

なお、大田区では山ではないが、「梨山」と呼んでいました。また、右岸川崎の方では、中瀬から殿町の方まで、多摩川沿いに果樹園があったのです。さらに、海岸地帯にも果樹園がありました。長十郎梨の大産地というのは、多摩川の両岸に明治から昭和初期まで存在したと考えて良いかと思えます。そして六郷方面は、江戸時代の後期に鶴見から雑色村に移植され、それが付近一帯に広がったと地元では言われています。そして明治に入ってから急速に発展していき、特に日清戦争前後に栽培面積が50～60町歩になりました。ところが、これをピークに左岸では、急速に栽培面積が縮小します。病虫害の発生が原因かと思われませんが、記録もなく原因は不明のままです。



【資料3-1】 明治14年 多摩川下流に於ける水田と果樹栽培地域の分布



【資料3-2】 明治39年 多摩川下流に於ける水田と果樹栽培地域の分布

⑥多摩川右岸の梨栽培

大正時代になると、河川改修の問題が出てきます。明治の末あたりは耕地整理とか河川改修などは、羽田や六郷の方ではまだはじまらないのです。むしろ耕地整理がはじまるのが早いのは川崎の方です。それに川崎の工業地帯というのは、大田区側よりも早くはじまるのです。電灯の光で新聞を読んだりすることができたのは川崎の方が早いのです。それに比べ大田区は長い間ランプでした。そういう意味で川崎はすごく進んでいたのです。東芝の前身の東京電気が来て、マツダランプが発明されて、そのあと蛍光灯なども発明されていますが、川崎の方が何かと近代工業が入ってくることによって都市化していくテンポが速いのです。だから電車も川崎の方が先にはじまります。それが東日本では最初の電車だと言われている大師電鉄です。東京ではまだ電車は通っていないのに川崎は通っていたのです。

そういう変化は恐らく川崎の方が早くて、大田区はそのあとを追いかけるということが近代化だったのですが、その関係が今のところわかりません。そして左岸の梨栽培が急速に減少していったのに対し、右岸が大正期にかけて発展していったのです。下流側の方は大師河原が主軸で、近接している田島・御幸方面へと広がっていきます。【資料4参照】

それと同時に桃の栽培もはじまります。さらに大師河原では公害に強いというので、イチジクの栽培もはじまるという変化も出てきました。

◇市域の町村別梨栽培面積

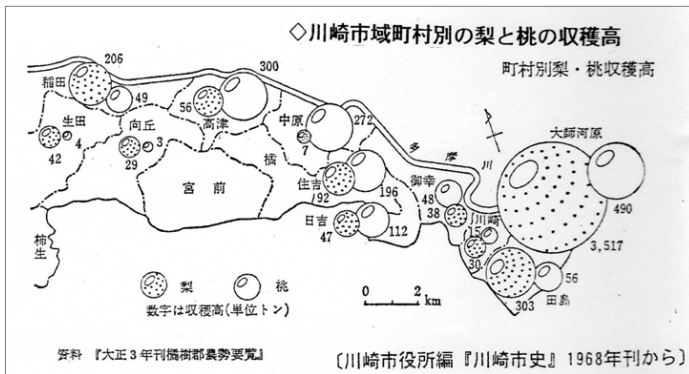
村名	梨栽培面積
大師河原村	100町歩
御幸村	26町6反歩
稲田村	18町5反歩
田島村	9町5反歩
生田村	7町7反歩
町田村	5町8反歩
その他	20町6反歩
計	188町7反歩

【資料4】

明治26(1893)年に当麻辰次郎さんが長十郎梨と命名した新種が多摩川沿岸に大きく広がり、「長十郎梨＝多摩川梨」の商標になりました。さきほどのお大師様の境内に立派な記念碑を建てたのはどこかという、橘樹郡果物業組合という梨を栽培していた組合が建てたのです。そして橘樹郡果物業組合が多摩川梨という商標に統一して出荷することになりました。ですから多摩川梨と言うのは、長十郎を中心に考えなければいけません。最近はいいい加減で、幸水や豊水もみんな多摩川梨って言っておりますが、上流へ移って、今なお梨畑が残っています。高津区の諏訪辺りに意外と大きな梨畑があり、口コミで来た方に宅配便による出荷をしているようです。川崎で梨もぎをやっているのは多摩区の堰だけになりました。

多摩区の中野島や生田辺りにあった梨園はもぎ取りをやめてしまいました。なぜやめたかと言うと跡取りがいなくなり、経営もいかに縮小して生産が減り、宅配便でもまかないきれなくなっているのです。地ものだという事で、結構注文があつて発送しています。川崎の名産「多摩川梨」と言っても、多摩川梨も、幸水も豊水もみんな多摩川梨になってしまっています。その多摩川梨が上流にいき、東京の稲城市では今でも多摩川梨が健在で、観光梨園が成り立っています。長十郎の片割れに会いたい場合は、稲城市まで行かないとお目にかかれませぬ。

観光もぎ取り梨園は戦前、小田急線が昭和2(1927)年に開通したのがきっかけで、登戸界隈の梨農家が始めます。始めたのは良かったが、戦前はすぐ雲行きが怪しくなり、戦争が始まって果物は不



【資料5】川崎市域町村別の梨と桃の収穫高

要不急作物に指定されてしまい、栽培してはいけないという統制に引っかけってしまったのです。こうしてあつと言う間に梨園が無くなっていました。戦後また復活しますが、衰えました。戦争が始まると、色々と生活に大きな問題が押し掛かってきたわけです。

私がスライドをとらせていただいた川崎の生田の農家のご主人は私と同じ年で、息子さんたちは大学を出て会社員になり、もう家を継がなくなっています。梨畑をつぶしてマンションを建て、家賃収入で生活している農家が多くなっているのです。それでもまだ梨栽培をやっているようです。最近しばらく行っていないので、機会があればまたお伺いしたいと思っています。

長十郎梨は今や産業遺産になっています。この産業ミュージアムは産業遺産及び近代化遺産を残して、それを検証していこうという試みのミュージアムなのです。

水田にしても、今はもう川崎にとっては農業遺産なのだと、去年の講座でお話させていただきました。水田に水をかける用水路や用水堰自体も、遺跡として考えなければならない時代になってきていると申し上げました。まさに長十郎梨はそういう意味で、区の木にさせていただいたことは歴史を残してくれたということで大変ありがたく思います。もう長十郎梨はなかなか食べられなくなりましたが、それがかつては大変な名産だったということ、長くこの土地に受け継いでいって欲しいと思います。

⑦大師方面の梨栽培

それでは大師河原の全盛期ということで話をしたいと思います。先ほど地図のところで言いましたように大師河原では、多摩川の沿岸、いわゆる河原に梨畑が出来たということ、塩害のない海岸地帯の地域で盛んにつくられました。その背景は、川崎区の農家の人たちの一軒当たりの耕作面積が少なかったからです。

種類	作付面積	樹数	収穫高
日本梨	70町歩	73,000本	146,000貫
桃	35 "	38,000本	76,000貫
無花果	12 "	14,000本	24,000貫
葡萄	12 "	21,000本	18,000貫
蜜柑	3 "	2,400本	6,000貫

【『大師河原村勢要覧』から】

五反以下で、小作農の農家が非常に多かったよう

【資料6】大正8年大師河原村の果実生産

す。その様な土地柄で農業だけでは食べられませんので、結局海へ出て漁業を内職としてやりたいと思ったのです。江戸時代までは海で漁業を行うのは獵師町の特権であつて、磯付き村の農家の人たちは漁業権も何もなく、自家用であれば許されましたが、売ってはいけないのです。売ると羽田や生麦の獵師町から文句が出るわけです。特に羽田獵(漁)師町とその沿岸の人たちとは訴訟ごとになり、幕府で裁かれるといった事件が江戸時代後半に起きました。大師河原の人たちは、江戸時代までは農業以外のことはできませんでしたが、明治に入ってから、届を出して県の許可を得られれば海苔養殖ができるということで、海苔養殖を始めたのです。【資料6参照】海苔養殖をやり、さらに

畑地では夏場に果樹栽培をやりました。その果樹栽培で得た資金で海苔養殖に必要な資材を購入したのです。

また、夏場の果樹栽培のほか、葉玉ねぎや西洋野菜をつくり、横浜の市場へ出荷していました。そのような多角的な農業経営を始めたのです。明治の時代になってから大師地域の人たちはエネ

	(作付)	(収穫高)	(反当収穫高)
大師河原村	200.0町歩	3,200石	1.6石
田島村	269.7 "	5,394 "	2.0 "
川崎町	120.0 "	2,880 "	2.4 "
町田町	297.6 "	5,654 "	1.9 "

大正10年『大師河原村勢要覧』から

【資料7】大正5年近隣町村梗米収穫高

	(3反未満)	(3反以上)	(5反以上)	(1町以上)	(2町以上)	(計)
大正5年	220	270	165	20	0	675
大正7年	250	260	120	15	0	640
大正9年	200	270	160	10	0	630

【資料8】田畑規模別耕作戸数

ルギッシュに活動しました。夏場は長十郎梨を育て、極寒の冬は海苔養殖をしたのです。ほかに、中瀬の人たちは、多摩川のヨシを蒔ってきて海苔養殖に必要なヨシズを作ったりしました。この地域の人たちの生活に対する意気込みが凄いです。

こと、多摩川の河川敷が大改修となり、梨の木が上流の農家へ1本1本売られていき、産地が大きく変わって行ったのです。私は梨づくりを調べてきて、大師地域の農民の方々の暮らしを築いてきた努力に打たれ、何とか後世へ伝えたいと思いました。同時に、その方たちはがむしゃらに働いたのではなく、うまく時期を組み合わせているのです。江戸や横浜の近郊都市であった地理的な条件を巧みに生かしてきたのです。大師の場合は籠へ詰め、舟で東京の青物市場へ持って行きました。いま舟に積む時の籠などが小学校などの郷土資料室に残っています。この地域は海苔養殖も盛んだったので、海苔の道具と果樹栽培の農具や病虫害を防ぐための薬品噴霧の機械などの産業遺産が数多く保存されています。

梨の方は早くからだんだん上流へ移っていきました。そのきっかけは、工場が建ち始め、影響を受けると言う

上の写真は非常に写りが悪いのですが、元版が「川崎のあゆみ」という写真集に載っています。写真で何を写したのか分かりません。ただ梨園なのは分かりますが、これが川崎区のどこか等説明文がないのです。そして説明文には全国の8割を占めた長十郎梨と書いてあるのです。その下はアートガーデンで写真展をやった倉形泰造さんという川崎市職員だった方が写されたものです。学生の中から撮っていた写真のネガを空襲の時に、家の庭に埋めていたのでネガは助かり、戦前の写真を結構持っていたのですが、戦前の梨畑の写真は出てこないのです。これは多摩区菅の梨園で戦後の撮影写真です。戦後の梨園で他の区の写真は私ももっているのですが、川崎区の古い梨畑の写真が見つからないかなと思っています。皆さまの中から古い写真が見つかりましたらお知らせください。そしてそれはしかるべき形で皆さんに見て頂く機会を作れば良いなと思っています。



① 全国の8割を占めた「長十郎」梨
【『かわさきのあゆみ』から】 ◇川崎区の梨畑
◇多摩区菅の梨畑



70ナシ狩りにきた一家
→多摩区菅の梨園で
1962(昭和27)年
【『倉形泰造写真集』から】

【資料9】梨畑

【質疑・応答】

Q:最後のところに「市場目当ての近郊農業」というのがありますがけれども、この場合船はどのへんからでるのですか。船溜まりがあったのですか。

A:渡し場のところですよ。大師の渡しと羽田の渡しと二つの渡し場があって、対岸と結んでいてその周辺にありました。ですからかつての日鉄建材があったところで、今川崎大師の大きな駐車場になっています。あの前の通りを堤防に突き当たって上がっていったところに大師の渡しがありました。

Q:長十郎梨がある意味では産業遺産だと感じたのですが、この上流から持ってきた木をずっと保存して、市の保存というような構想なのでしょうか。

A:それも大事だと思います。今日は急遽後ろに出てきたタウンニュース記事が7年前にさつきもちよとと話した中本賢氏が大騒ぎで持ってきて、どこへ植えたかという若宮八幡の境内に植えたのです。もう実がついてもいいはずですが、健在なのでしょうか。桃栗三年柿八年って言いますが、まだ8年は経っていないのかもしれませんが、苗木ではなく若木で持ってきました。あのときの中本氏の談話によると、もうすぐ2~3年後には実を採るようなことでインタビューに応じているのですが、一向に聞こえてこないのです。私もちょうどイベントに参加しており関心は持っているのです。この間アカデミーの人たちとあそこを見に行ったときにちゃんと木はありました。

Q:大事なことはやっぱり、本当になくなってしまうたら困ると思うのですよね、対応性がなくなるわけですから。だからモニュメントではない本格的なシステムで保存していかないといけないのでは。

A:それはフルーツパークでやっていると思います。フルーツパークというのは農事試験場みたいな形で発足して、そして梨栽培農家に対していろいろと技術的な援助をする、特に花粉付けなんかの花粉の採取はずっとやっていたのです。恐らくフルーツパークには長十郎梨もきちんと保存されて栽培されていると思います。あと宿河原にある緑化センターは農事試験場でしたが、長十郎をどうしているかと聞いたことがないですから、聞いてみたいと思います。フルーツパークはやっていると思います。

Q:梨は花粉をつけないとダメだと言いますよね？そうすると長十郎の木に長十郎の花粉をつけなくてもなっちゃうんですよね？だから本当になった実が長十郎なのかかわからないと思うのですが。

A:でも長十郎ばかりあるところであれば、みんな長十郎になるんじゃないでしょうか。

Q:長十郎じゃない花粉がつく場合もありますよね。

例えば二十世紀の花粉をつけちゃったらこれはなんていうのかなと思いますが。

A:長十郎系と二十世紀系と掛け合わせてつくったのが清玉なのです。だから長十郎梨の立派な子孫なのだと言って稲城市の農園(清玉園)では長十郎を持ち上げているのです。そこでは「多摩川梨発生の碑」を建てています。

以上